

[報告 4]

組合員からの提案

私が考える農業・JA 改革

牧 秀宣 (有限会社ジェイ・ウイングファーム 代表)

■プロフィール

◇1952 年生まれ。1971 年海外派遣農業研修生として 2 年間アメリカの農業を学ぶ。1993 年(有)ジェイ・ウイングファーム設立。現在、愛媛県農業法人協会会長。

■(有)ジェイ・ウイングファーム概要

◇「地域から耕作放棄地は出さない」との方針のもと、アワ、キビ、ヒエと麦を中心に生産から加工・販売までの一貫経営を確立し、51 ヘクタールの経営委託、延べ 59 ヘクタールの作業委託を受けて、地域の農地を守っている。

◇「顔の見える商品販売」や「契約に基づく計画生産」の理念のもと、消費者のニーズを常に把握し、積極的なマーケティングを展開。

◇青森・佐賀・徳島・広島 の 4 法人と広域連携することにより、麦・雑穀類の安定生産・安定供給を図っている。

◇第 32 回日本農業賞大賞受賞。

日本の中では「農業はダメ」と言いながら、海外の農業研修は OK と言っていたのだ。しかし海外研修を受けることができるのは 19 歳からだから、1 年遊ばなければならない。



そこで、農林試験場で当時やっていた講習を受けた。自分は百姓の息子だが、農業のことは何も知らないから、試験場に入るとほとんど 1 年間、自分で先輩を探して研修に回った。「アメリカに行ったら基礎的な能力がいるから」と休みをもらって、養豚も肉牛も柑橘も回った。後で気づいたことだが、人に言われて行ったのでなく、自分で動いたから、いろいろなことが身についたのだと思う。

アメリカ農業をこの目で見て

1 年経ってアメリカ研修に行くことができた。「日本はなんて情報のない国なんだろう」とつくづく感じた。アメリカの農業について多少は聞いていたが、何もわからない。そして行ってみたら、農家が生き生きとしている。その反面、1970 年当時は大農がどんどん増えていき、小農はつぶれていった。日本の今の「構造改革」みたいなもの。

アメリカはやることがとてつもない。国や州が動いて、数千町歩もの農地がものの 3 ヶ月でできあがる。日本と同じで川沿いの農地は面積が限られるが、川より数百メートル上の台地(フラット)が空いていた。アメリカは、言うなればまだ天地創造の世界で、日本のような山ができるのにまだ数億年かかるほど。山の上は真っ平。そこに水をあげると、数千

「農業はダメ」の風潮のなかで自ら学んだ

僕はなぜ農業をしてきたか。そこから話したいと思う。

私が高校を出るころは、「日本総農業いらん会」という感じだった。進路指導からして「みな勉強して勤めなさい」というもの。大学は農学部に行きたかったが、「お前は普通科を出たのに、そんなところへ行く必要はない」と選ばせてくれない。

たまたまそのとき、「派米研修」というアメリカに 2 年間行ける制度を外務省と農水省がやっていた。

町歩の農地はあつという間にできる。その水をとる許可を州が出す。

日本と違うところは、まずは区画整理をすること。1 区画は 1.6km 四方 (マイルスクエアという)、これに区画分の番号をうち、くじ引きで農地が分配される。すると、それぞれが勝手に農地に線を引き、道をつける。あとは機械力。とんでもない機械だ。多少の小木があっても、あつという間につぶしてしまう。つぶして畝を立て、ジャガイモを植え、水が来るまでにまた 3 ヶ月。そしてその数千町歩に水が入り実るのに、たった半年。ジャガイモを処女地で育てて肥料を与えたらだいたい普通の 3 倍くらい大きくなる。そのため、1~2 回目はものすごく収穫でき儲かる。それらはポテトチップスになったりする。

これを見たときに、「これは一人の力ではない。とんでもない力が動いている」と感じた。そして、「これが本当の農業か?」と思った。じっと見ていると、何年かするとそこはイヤ地を起こす。そこはすぐに牧場に変わる。牛を放牧して次にまたどこかへ行く。「これは焼畑農業だ」と思った。カリフォルニア南部では塩害がすごかった。吸い上げた水をどんどん入れると、塩が残留していく。ニンニクなどはほとんどできなくなる。「やはりこれではダメだ」と思った。人工的にやってしまうと、自然は全く無視されて進んでいく。そうすると、かならずダメになっていくんだなとその時に見た。まだまだ広い土地がたくさんあるので、当分続くだろうが、将来的には大変だ。

「効率」一辺倒が反省されつつある

翻って自分の生まれたところを見ると、小さいとはいえ、何百年も同じ土地で同じものを作って生活している。

生活できなくなって農業をやめたりするのだろうか、ではなぜ生活できないのだろうか。結局は販売力がないからだ。もともと小さな生産組合があったときには、みんな自分で販売するものを作っていた。肥料なども作った。

ところが、それが「効率」という響きのいい言葉のもとに、どんどん変えられていった。「効率」は数字を上げるための効率のこと。その中で、人がど

うなっていくのかということとは計算の中になかった。気がついてみたら、「効率」のため、「作る人は作る、売る人は売る」と分かれていった。そして今は「6 次産業化」「農商工連携」。ちょっと待ってこれと言いたい。そもそも農業は 6 次産業で商工業との連携もあったのに、それがあの時代に潰されていたのではなかったか。

なぜこんなことを言うのかというと、ほとんど知られていないが、じつは今、アメリカは、ほとんどが日本的な経営に変わり始めている。「スモールファーム」という言葉が 10~20 年前からあって、50~100 町歩の土地で (アメリカでは「小規模」)「有機農業、無農薬栽培」をしている。その結果、農業に地域性が出てきている。病害虫を避けるためチップスの少ないところで栽培するとか、ほかに水の問題などもあり、「適地適作」に戻り始めている。

農業の見方が変わりはじめた

昭和 30 年代、農業界には「人がいない」「人口扶養力がない」など「5 つの赤信号」が出ていると言われた。いまだにずっとその対策はできていない。「まずやれることはやろう」という動きがないと、みんなバラバラで動いて、とてもじゃないが人は育たない。

ましてや、ヨソモンなどいろいろな問題があった。僕でも、地元で産まれてもヨソモン的だった。当時、「農業をするなんてアホか」「アメリカ行って頭がおかしくなったか」と見られていた。気にしていてもどうにもならなかったので、親父に頼んで 1 町歩の土地を 3~4 町歩にしたいと、農協の指導員や青年団の方たちの協力で、3 町歩だけ裏作で借りることができた。米はまだまだ力があつたので、その裏作で麦なら作れると借りることができた。僕はその 3 町歩の麦からスタートした。

そして今の時代になって農業といっても、地域性がある。都会の中で育つた人にとっては、農業は新しいものに見えたのかもしれない。どんどん都市化して、自分たちが歩く場所も狭くなり、畦に座ってゆっくりポーっとする場所もなくなる。すると、だんだん自分たちが何を目的にしたかを考え始めたのだ。まず都会の人がわかり始めた。

「いくらでも緑や自然はある」と言うが、緑は自然にできているわけではない。元農林中金の田家康さんが『気候で読み解く日本の歴史』という著書で述べているが、奈良時代から江戸の初めまで、日本の山は禿げ山だった。資源がなく、どんどん木を切り倒したためだ。奈良時代には、そのために水害が多かった。木がなくなったら、土地も荒れていく。今の環境問題や農業の視点はそこまで行っているはず。儲けることも必要だが、それが先になってしまうと、また木も切ってしまうことになる。計画性と言いつつも、全体を見渡す力がなくなってくるのだ。

基準を立て直そう

農協組織は全国を網羅している。それぞれがああでもない、こうでもないと言っていたら、まとまるものはないと思う。どこか基準を一つ置かないと、基準が全部ずれ始めている。農業をどうするかと考えたときに、「農家がどう、大規模化がどう、近代化がどう」と言うのはおかしい。「農業の近代化」とは何か？ 機械化し、ロボット化することが近代化と思っていた。だが、アメリカはどうか。先ほど話したように、「効率」から「非効率」に変わっているのだ。「非効率」は悪い言葉に捉えられるが、「効率」一辺倒ではダメだということにどこかで気づき始めているのだ。

新しいものに振り回されないよう

では、私はなぜヒエやアワを作っているのか。今はコメより高く売れているが、始めた当初は「鳥の餌を作ってどうする」などと言われていた。

調べてみると、奈良時代にはキビのほうがコメよりも高い値がついた。その当時は価値があったのだ。アワ（阿波）の国（徳島）にはアワ（阿波）神社があるし、東京にはヒエ（日枝）神社もある。アワは原穀で 1kg 1200 円する。アワを 1200 円と認める消費者層が出ているのだ。シコクビエという品種も作っていた。じつは、シコクビエはセンチュウ害を回避するため移植栽培が行なわれていて、これが稲の移植栽培の原型となったのだ。

このように、昔のことには、まんざら捨てたものでもないことがたくさんある。昔に戻れとは言わな

いが、新しいものがすべて正しいという概念はもう捨てないと、各地域のブランドなど絶対にできない。人が求めて信頼あるものが結果としてブランドになるのであって、「〇△ブランド」として作ったものはブランドではない。先に名前をつけてはいけない。名前は勝手に向こうが言ってくれる。そのときに、その名前を使ったらいいのだ。

つくる側、食べる側のことが分かっていない商人など中間の人が幅を利かせると、大変なことになる。たとえば、今「グルテンフリー」が流行っているが、私は、グルテンが悪いわけではないと思う。「昔小麦」という小麦を食べたなら、絶対に小麦アレルギーは出ない。最近の小麦を食べるとアレルギーになる。小麦がどんどん種子改良されてきていることすら我々は分かっていない。病気も来ないし虫にも食べられないし美味しいはずだが、量がないために捨てられた品種がたくさんある。農協ならいろいろな種子を扱うだろう。

非常に大事なことがここにある。農家の一番のリスクは、天候・地形・場所。これだけはどんなに自分らがあがいても変えられない。それなら、その天候や地形に合うものをつくるように戻ればいいのだが、日本全国「〇〇」というコメ、「△△」という野菜になる。これは本来ありえない話だ。「同じ種子で同じものを作って、何がブランドか！」という思いが私の頭の中にずっとあった。色々な品種、地域品種があつてこそ、日本という世界から見たブランドだと思う。それで、こうしたことを始めたのだ。

農業はなんとか食えればいい

私の農地はぜんぶ借地。30 年と付き合っている農家もあるが、すべて 3 年ごとに更新する。「面倒くさいから 10 年にしてくれ」と言ってくる貸し手もいるが、「爺さん、10 年したらもうおらんで。おらん人と契約はできん」（笑）と言って 3 年ごとにしてもらっている。これは、3 年ごとに先方もいつでも「返してください」と言えるということ。将来農業をしたいと帰ってきたときに、農地さえ残っていたらできるが、残っていなければできない。

周りからは「利益を上げなければなりませんよ」と言われたが、働いた結果が利益であつて、「これだけやったらこれだけ儲かる」と計算したところで、雨一降りですんなり利益は飛んでしまう。たまたま、

若干の利益を出した状態で残しているの、あまり文句を言われずに済んでいる。農業はそれでいいと思う。皆が生活してなんとか食べればいい。そういう基準なら農業はそんなに悪い仕事でもないのではないか。

農家は自分たちで資源を管理してきた

いま TPP が大問題になっているが、過去にも GATT やら何回も似たような波がある。ずっと遡ると、ペリーの黒船来航からじゃないかと思う。そのころに来た外国人は、日本の田んぼの風景を見て「世界の中でここまで管理された地形は見たことがない」と日本を絶賛している。そのころは、「自分たちの周りは自分たちに責任があるから、自分たちで守る」「草刈りをするによって、草はぜんぶ餌になり肥料になる」と活用していた。

河川の管理も同じだ。河川の「土手」というのはもともと道だった。人が通ることによって踏み固められ、通ることによって危険な場所が発見されていた。「土手は農家が管理したほうがいい。あなたの土地に隣接したところは自由に使いなさい。その代わり削ってはいけない」と言っていたから、土手はきれいなものだった。草もぜんぶ牧草として利用していた。

ところが、土手が身近になくなった。「そこは国の土地で、木を植えたり要らぬことをしたらいけない」と言われた。効率化で牛屋さん、鶏屋さんも大きくなり、海外から安く買えますよ、ということ餌が要らなくなったから、土手の草の利用もやめてしまった。地域の資源が埋もれたままになっている。

「お金をくれ」の前に自分たちで

「遊休地」と言う前に、各地域で、「国が持っているそういった土地を管理してあげるから、管理費を出してくれ」とやればいい。僕らも改良区でやると、地域の人に「なぜあの木を切ってくれないのか」と言われる。「県や国の管轄だからできない」と言っても、「改良区だったら周辺を整備してほしい」と言われ、もめることがある。誰が指示を出して誰が何をするかすら分からなくなったものだから、荒れるばかりだ。僕も頭にきて、1 日で草を全部刈ってしまったことがあった。そうしたら、別の土手で

も同様に草を刈るところがでてきた。「あそこができたのに、なぜこちらはできないんだ」という話になったのだと思う。

「お金をくれ」と言う前に何かをやれば、物事は間違いなく動く。やる人がいないだけのこと。「これをこういうふうに、皆さんの知恵を活かしてやればこうなるんですよ」ということを伝えれば変わるのだ。それが営農指導であり、普及事業だろう。

情報はタダではないのだから、営農指導は有料にすればいいと思う。そうしたら、農業者もそのお金を払いたくなくなったら、その分勉強するようになる。タダだと文句しか来ない。「有料」とは「意識をつける」ための方法なのだ。これらのことが認められて、初めて

補助金などの意味がわかると思う。

僕は、土地の管理もするが、請負もする。うちの田んぼは 10 アール以上はあまりない。全部小さな田んぼ。田んぼの四隅を刈らないと機械が回らない。周囲の請負の田んぼも畦の隣まで苗を植えるので、機械が入らない。最初は仕方なく僕が無償で刈っていたが、これはいけないと思い、有料にした。お金をとることが目的ではなく、「自分でやったことは自分で始末してくれ」ということを教えるため、お金の価値を分かってもらうためだ。5000 円にしたら、みんな自分で刈るようになった。こういうことも、もともとは指導や話し合いの中にちゃんとあったのだが、触れ合うことがなくなり、人とのつながりがどんどん遠くなっていったために、こういう問題が出てきたのだ。

おもとに帰ろう

農業の現場が全く変わってきていることは間違いない。農協やわれわれ法人や行政（農林振興課など）が一緒になって取り組めばいいのだが、なっていないところが多い。それを元に戻していくと、最終的に農協というものは、生産組合のもとに戻らざるを得ないと思う。集落営農もおもとは生産組合。

なにも元に戻せというのではない。だが、生産組合が発想し、物事を完結していくような仕組みを作っておけば、一方がつぶれてももう一方で助けることができる。今は、一つ潰れたらぜんぶ潰れてしまう。こうしたことが起きているから、ぜひ「農協と

は元々どうだったのか」ということをとくに若い人はもう一度見てほしい。そのとき、「自己責任」が必ず出てくる。「組織はどうあるべきか」「何のための組織なのか」を自然に考えるようになる。今ちょうどよい時期だと思う。座談会なり話し合いなり茶話会なりを増やすことがまず先ではないか。そこで得られたものを伸ばせばいい。その部分をぜひ改革して行ってほしい。それしかないと思う。とんでもないことが起こっているときに、力がなかったら生きられない。格好だけではだめ。しっかりとした組織があれば、ついていける。

僕はなぜ農業法人にしたかと言うと、税務署から言われたからであって、何の理由もない。法人にしても税金がかかり、何もいいことがない。利益が出なければ仕方がないから、やっているだけ。あとは、地域で若い人が残っていったらいいなあと思っている場所になっていくだけ。

今はコメや麦を作っているが、この先何を作るかは分からない。何十町歩もあつたら、使い道に困る。それがどんどん増え始めている。愛媛県では、3~6町歩くらいを持っている人が、辞め始めた。1~2反を辞めたのを代わりに作るのは簡単なのだが、3町歩や6町歩が一気に来ると、これは難しい。そういうことが起きているのだから、まず足元から。

やれる人は農家でなくてもいい。本当に好きな人、農業したい人がやればなんとかなる。その「したい」と思う人をきちっとつかむためには、まずは数字(利益)から入らず、本人の意思をどう確かめていくかというのが大事だと思う。私も以前にアメリカで研修をした際に、挑戦して合格して行けるまでに、しごきみたいなきつい研修を受けて1年かかった。どこで本人の意思が変わるか、どこで本音が出るか、1年間じっと見ていたのだろう。

今のいろいろな問題というのは、基準がずれてしまっている、つまり農業の哲学がなくなっているために起きたことではないか。そこをまず基本に戻って考えていく。そこをどうするかが担い手育成の一番のスタートだと思う。ぜひ、協力してやれることはやっていけたらと思う。

* * *

(松岡) 個別最適ではなく、地域全体の「全体最適」だと。その「全体最適」を見るときに、「基準がずれている」という言葉を何度かお使いになったが、まさにその基準となるものは「哲学」だと。もっと言えば、地域の自然、生態系、あるいは歴史も含めた文明感、社会感、農業感、あるいは農協人からすれば、農業協同組合をどう位置付けるか、あるいは農業協同組合としての哲学をどうもつのか。

農地中間管理事業も同じだ。「国からお金が出る。その面積にどれだけ金を落とせるか」

ということばかり言われているが、そもそも農地集積のベースには「出し手がいるから受け手になれる、受け手がいるから出し手になれる」という、地域の中の出し手と受け手の信頼関係がなければならぬ。その信頼関係が成り立つかどうかは、それぞれの地域農業の「全体最適」という哲学をもっているかどうかにかかっているのだ。ところが今は、哲学がないままに、経済合理性だけで農地集積や担い手育成が語られている。

今回の農協改革について、われわれはもう一度、地域農業観や地域の歴史・文明観、あるいは生態系といったそれぞれの哲学・社会観をもちながら、営農指導に当たっていく、あるいは地域農業を考えていかなければならぬ。その重要性をご指摘いただいた。

いまや、「効率の非効率」が出てきている、あるいは「経済の不経済」が出てきている。牧さんが指摘されたような基準・哲学を持つことによっていろいろなことが見えてくるのではないか。